
幻想郷見聞録

五円玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷見聞録

【Zコード】

Z60250

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

幻想郷に迷い込んだ主人公ゲンは幻想郷の人たちと会いたいままならないことを学んでいく。

(見聞録ばつかですいませんm(ーー)m)

プロローグ／第壹章

プロローグ

ここは、どこだ？ 辺りは薄暗く、不気味な霧がやや薄くかかる。しかしそのことを除けば、とても見慣れた場所だ。しかしおかしい。自分はついさっきまでここにはいなかつた筈だ。
わざわざまでは・・・、どこにいたんだっけ？

第壹章 博麗神社

気がつくと朝になっていた。いつの間にか寝てしまつたらしい。
とりあえずあたりが明るくなつたため、自分の手荷物を確認した。
財布、服、下着、ライト、

そして、テント？ キャンプにでも行く途中だったのだろうか？

そして辺りを見回すと神社があり、その奥に人影が見えた。とりあえず話を聞こうとしたが、せつかく神社があるので、お参りすることにした。お賽銭を賽銭箱に入れ、手を一つ叩く。そのとき、先ほどの人影の人物が視界に映つた。口をこれでもかというぐらい大きく開けてこちらを見つめている。とりあえずここがどこか聞かなくてはならないため、

「あのぉ、ここどこ？」と尋ねた。

その人物はやつと口を閉じ、こういった。

「幻想郷だけど？ つかあんた人間？」

「あたりまえだ。これをみてどこが人間じゃないってんだよ」

「じゃあまず自己紹介してもらいましょうか」

「尋ねるときは自分から名乗るのが普通だろ？」

「つたへ、めんどくさいわね。あたしは博麗靈夢。」この博麗神社の巫女よ。さ、名乗ったんだんだから今度はあんたが名乗りなさい」「俺は、ん?俺の名前は~、ん~、ごめん忘れ・・・」

「ほかっ!思いつきり 彼女にとつては普通だらうが 殴られた。

「それくらいで殴るなよ~」

「自己紹介もまともにできないんだからじょうがないでしようが! つたく、これでも手加減した ほつなのよ?あんたがお賽銭入れてくれたから」

「でもぜんぜん痛えよお~」

「要するに覚えてないのね?なら仮の名前がいるわね。なにがいい?

「ここ幻想郷だよな?ならゲンでいいや」

「なによ、いいやつて。まああたしはどうでもいいけどね。」

「ひしてゲンの幻想郷生活は幕を開けたのである。

ゲンが幻想郷にやつてきてちょうど一ヶ月が過ぎた。ゲンは巫女の仕事を手伝う（巫女の仕事とは名ばかりでほとんど雑用）のを条件で神社に泊めてもらっている。テントがあるのでここに。ある日ゲンがやつと田が覚めたとき、靈夢が昨夜行っていたことを思い出した。

「やべ！ 寝坊した！」

昨夜

「ゲン、明日はちょっと用があつて魔理沙の家に行くから早く起きたさいよ？ 寝坊したらおいでいくからね。地図おいとくけど」

「わかつたああああ～」

バタムツ！ ゲンは布団に倒れこみいびきをかいて爆睡をはじめた。

「え～っと地図によるところの先に・・・、あつた！ ってこれ？ 瞬夢のいつてた魔理沙の家つて？」

目の前にあるのは、オンボロの家だ。

「何がオンボロだつてえ～！？」

「うわあ！」

一瞬の光がほとばしったかと思つとさつきまでゲンがいたところは小さなクレーターができていた。

「私の家見てオンボロとか一度というなよ！ つたくよ～」

私つていつたのに口調は完璧少年だ。つか危険だ。こいつ。

「まったく騒々しいわね。ん？ あ、ゲン今ついたの。おそかつたわね。この子が霧雨魔理沙。魔法使いやよ」

ハイ？ま、魔法使いですか？

「私の家をオンボロつて抜かすもんだからお仕置きしてやつたぜ！」

「白邊げにいうか？そこ」

「おい、ゲンとかいつたな？新参。またマスタースパークの餌食になりたいのか？」

「ひ、卑怯だあー！俺が何もできないことをいいことにいい！」

「何でお前、スペルカード使えないのか？」

「なにそれ？聞いたことねえけど？」

「今みたいなのはスペルカードっていうものから出される技だ。ほとんどのやつは持ってるぞ。なあ靈夢？」

「この子現世から迷い込んだらしくて、スペルカードも何もないのよ」

「あ、財布の中にこれ入つてた」

「あ！スペルカード！」

「ん~と『龍符 焰龍刻印』？」

キュオオオオオオン！この森全体を覆うような赤い龍が一匹、ゲンの右腕から飛び出してきて一吠えするとゲンの右腕に刻印となつてもどつた。

「なんだつたんだ？今の」

冷たい風がゲンたちを押し流すよつてピューッとふいて、消えた。

幻想郷の人たちにもすっかりなじんできたゲンにはある能力のよつなものが少しずつ芽生え始めていた。その能力は、幻想郷の異変を感じることができの能力。なにか感じるたびに靈夢と魔理沙に伝え、小さなうちから異変を消す仕事にゲンも靈夢、魔理沙もすっかり漫つてしまつた。

ある日、ゲンは寝床で激しい頭痛にうなされていた。そして頭に響く声が一つ、

「たすけて・・・」

ガバッ！ゲンは激しい汗と体に滴らせ、ハアハアと息荒く呼吸をし、「なんだつたんだ？いまの」

とつぶやいた。この声の主が後に幻想郷そのものだということにはゲンは知る余地もない。

次の日、ゲンは昨夜のことを靈夢、そして魔理沙に伝えた。

「『たすけて』ねえ・・・。なにをかしら？」

「ゲンに聞こえたつてことは、異変と何か関係あるんじゃないのか？」

相談中の魔理沙と靈夢にゲンが割つて入つた。

「次から俺もついていつていいか？」

「ちょっと待ちなさいよーあんたスペルカードもまともに使えないんでしよう？ついてきたつて足手まといよー」

「いや、一緒に戦うとかじゃなくて・・・、実際あの「声」を聞いたのは俺だ。だから、ついていつたほうがいいかなつて・・・」

「あんた、なにをいつ・・・？」

なにか喋ろうとした靈夢をさえぎつて喋つたのは魔理沙だ。

「まあ、ゲンのこつ」とも一理あるんじゃないのか?いいよな、靈

夢?」

「もう・・・いいわよ。ただし護衛は魔理沙ね」

「なっ!」

火花を散らす魔理沙と靈夢をスルーしひんは
「レミリアたちにも一応相談してみようぜ。紅魔館にいくか」と二人を促し、ゲン一行は木の生い茂る森へと足を踏み入れた。

第参章（後書き）

なんかもう龍のスペルカードとかざらいでもよくなっていますね（ハア

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025o/>

幻想郷見聞録

2010年10月31日03時29分発行